承継 Project

File.03
関越統括群馬本部
須藤 準一
須藤 和廣

今回ご紹介させて頂くのは、関越統括本部の現会長の須藤準一氏と、その父・須藤和廣氏、この親子の「承継」である。

現在、準一氏が代表、和廣氏が会長を務める㈱エレガンスは、群馬県に美容室10店舗、理容室3店舗、FC美容室2店舗を展開しており、社員数はFCも合わせると100名にのぼる。

和廣氏はSPC歴42年！そして息子の準一氏からしてみれば、物心ついた時から常に身近であったSPC。SPCと共に成長し、承継した「企業とも言えよう。

須藤家の歴史

和廣氏は昭和18年、東京都葛飾区の生まれであるが、生後まもなく戦渦の厳しい東京を離れ、父の実家である群馬県に移住した。そして25歳の時、高崎市に「ストウ理容室」をオープン。その7年後、SPCに出逢う。当時は技術を極め、店も繁盛していたが、ある会員から言われた

「須藤さんの腕はどんなに良くても2本だけ。その腕を30本、50本に増やしてみては？」

という言葉から、営業より経営の方が面白そうだと感じ、入会を決めたという。

入会してからは、様々なノウハウを勉強させて貰い、2年後には美容室を出店。当時のSPCには「オープンパック」という画期的なものがあり、オープン前にスタッフの技術指導や店のローテーション、受付、チラシ作りなど、30万円を支払えば教育も合わせて全てのフォローをして貰えた。また、出店する土地も人の集まる商店街の良い立地を確保し、美容室を一発で成功させたのである。

また、和廣氏が29歳の時に、長男の準一氏が生まれた。準一氏は小・中学校ともに学級委員長や生徒会長を務める優秀さで、野球一筋の少年であった。小さい頃はパイロットに憧れていたというが、中学生になる頃には、自然に「野球が終わったら経営者になろう」と思うようになっていたという。

準一氏は美容学校を卒業してから、関西の本田歴代の経営する㈱J&Kで6年間修行し、25歳の時に自社に戻った。この時の経験が今でも大きく経営に生かされているようだ。彼が正式にSPCに入会したのは32歳の時であるが、修業時代の事もあって、

「SPCの偉い人は、親との関わりもあって皆、親戚のおじさん、おばさんのような感じです」

と語る。

「修行して社員の気持ち、会社組織を体験する事が大切」という父の考えから、経営者を目指した準一氏も、このようにしっかりと修行を積んだのである。

経営者としてのルーツ

美容室展開が順調な中、思い起こせば経営者としてのルーツはまさに父から受け継ぐものが大きいと和廣氏は語る。

和廣氏の父は、もともと東京・日本橋の料亭で料理人をしていたが、群馬に戻り、料亭の暖簾をもらい「花屋」という名の食堂を営んでいた。支店を出したり、知人の軒下を借り、バートを使って2坪足らずのお惣菜屋さんを2ヶ所もったりと、小さな町の実業家であり、夢追い人だったそうだ。頑固なところもあったが面倒見が良く、地域の飲食店組合の組合長を20年以上務め、有名店や大手企業の経営者からも一目置かれるような存在で、厚生労働大臣賞も受賞した。

「子は親の背中を見て育つ」と言うが、和廣氏の内面にはいつしか父のDNAが宿っていたようだ。実際、彼にとって美容室の店舗展開は楽しく、そんな父の背中を見て来た準一氏も、修行時代から「北関東一の繁盛店をつくる」という目標を持つなど、経営者としての血筋を脈々と受け継いでいるようだ。

和廣氏とSPC

和廣氏が白衣を脱ぐ事にあたっては、「自分のお客様を捨てた」と周りからも良く思われなかった。しかしSPCの先輩や仲間たちに背中を押されながら美容室を出店し繁盛させた事で、「この道を選んだのは間違っていなかった」と感じるようになっていった。

彼は組織でも勢力的に活動する中で、生涯忘れられない出来事に遭遇した。第8代大野勉、明兄弟理事長の時の事である。群馬本部に「RFC（共同経営）でダントツ1番になれ！」という無理難題を投げ掛けられ、24人の会員は半数以下に激減。8000万の手形による3店舗の厳しい運営の中、悲劇は起った。当時リーダーとして活躍した、和廣氏の一番の兄弟分であった佐藤正憲氏が白血病で急逝したのが悔やまれると言う。

「私自身も倒産の狭間で、妻から離婚届けが準備され、精神の異常から心臓を悪くして、死の寸前を体験したのです。しかしこの出来事は、『死さえ無ければ、どん底が宝に成る』という事も教えてくれた。財を無くしても、まだ若さと大事な家族が居るではないか！と、腹が据わった事で覚悟が出来た。自分はいつでも裸になれる。何があってもまた元に戻るだけ！その覚悟を持った時から、私には怖いものがなくなったのです。その後、経営で悩んだ事も無く、油断なく危機管理する事が自然に身に付きました」

大きなドラマを乗り越えて、益々勢力的に経営の道を切り開く和廣氏であった。

和廣氏と横山室長

さて、前にも記したようにSPC歴42年という和廣氏は、組織においても多大な歴史と功績を残している。関越統括本部第3代会長、副理事長は3期6年、各地の担当は6期12年、全国理美容職業訓練校連合会代表は4年、本当に様々な役職を経て、今があるという。

「これまで役職を通じ、諸先輩方や仲間の皆様に支えられ、自身の器を拡げて頂いた事に感謝しています。特に横山室長からは様々な挑戦を与えて頂いて来ました。エレガンスアカデミー職業訓練校の設立。アメリカの大学では『美容と健康』について論文を書き、博士号を取得しました。その流れで『目指せ健康美容師』を出版し、2000年には室長の勧めでNPO『日本健康美容協会』を設立しました。理念に『美は快を生み、快は健康、幸せを生む』を掲げ、現在もエレガンスと共有し、高崎市の行政イベントに参加しながら、群馬県から日本、世界に夢を描いています。更に文化人に向かって、日本舞踊の名取を取り、妻と夫婦で全国大会で何度も舞踊をさせて頂きました。最近は高崎市後援のシャンソンメンバーとして、1000人の観客の前で、海野室員と歌わせて頂いています。横山室長が『おい、須藤君！これやれよ！』というお声掛けのままに、『はい！』と何でも挑戦して来たのです。アルベルトシュバイツァー顕彰を受賞させて頂いたり、今となっては凄い経歴になりましたが、SPCに入り、諸先輩方に背中を押して貰って、今があります」

このように和廣さんは語る。

準一氏の道のり

優等生の野球少年で甲子園にも出場した準一氏。その後も曲がる事もなく美容経営者への道を着々と登り続けて来たが、過去をこう振り返る。

「J&Kの新人時代は、コンクールで競い合ったりする事が何となく野球に通じている気がして、最初は社内でもビリから2番目でしたが、熱心に練習してSPCの全国大会で日本一になりました。小さい頃のパイロットになる夢は、今では飛行機に乗る側にシフトしていて、40歳までに50回は海外に行きました。自分ルールがあって、仕事の休みが1日だったら東京へ。2日だったら飛行機で国内のどこかへ。3日以上休める時は海外へ。妻に出会うまでは一人旅を繰り返して全国を制覇し、妻と二人でも2度目の全国を制覇をしました。世界を見て来た自分としては『いつかは世界に出たい!』『世界から出勤したい!』そんなグローバルな夢を持っています。SPCもGLOBALに進化していくように、自分も世界から日本を客観的に見られる自分づくりをしていきたいと考えています」と語った。

準一氏が25歳で自社に戻って来た時には、やはり古株のスタッフや店長たちの権力が凄まじかった。そこで和廣氏は、自社の役職を整理して、準一氏が円滑に自社を承継できるように働きかけた。

「経営者っていうのは、仕掛人なんですよ。店が上手くまわるように、会社が上手く運営できるように、仕掛けをする」

そう、和廣氏は語る。組織での活動に時間を割いている間、店や会社を守り続けたのは他でもなく準一氏である。息子という強力な右腕を得てこそ、和廣氏はここまでの功績を積み上げたと言っても過言では無い。

また、準一氏が自社の社長を継いだのは2011年の時。丁度、東日本大震災の直後で、計画停電で売上げが大幅にダウンする時期だったという。それでも社員に給料を支払わなければいけないという現実は、順調な滑り出しとは言えないスタートだった。

「父から受け継いだ一番大切な事は、スタッフとの関わり方。美容業は、人を活かしてなんぼの業種です。J&Kでも社員との関わり方や盛り上げ方を学んで来ましたが、やはり関西と関東では、少し温度が違うような気がして、地元にフィットしたやり方を工夫しています。企業理念などの目に見えないものは、変えない。でも、やり方など目に見えるものは変えていくし、新たに自分で創り上げて行く。サロン名を変えたり、FCを作ったり、雇用の仕方を整備したり、生涯雇用できる会社作りも推進中です。社員のライフスタイルに合わせて、独立しなくても50万、80万と給料が取れる社員を育てています。自社は今年で50周年を迎えます。記念イベントもやりますが、ここで自社のひとつの成功例を出したい。そして200名体制に向けて加速をしていきたい」と準一氏は語る。

須藤親子の「承継」

「自分がガキ大将の後を追いかけるようなタイプの人間だから、幼少時代から学校でもスポーツでもリーダーシップを発揮する息子を見て来て、何とも頼もしいという気持ちでここまで来ました」

と和廣氏。現在、SPC組織では関越統括本部会長を務める準一氏は、

「私には『程よくホドホドに』というモットーがありまして、1人のスターを育てるより、ホドホドの100人を育てる事にやり甲斐を感じています。J&K時代から、他人より劣っている人間を持ち上げる事にモチベーションを持っていました。『僕の手に掛かれば、誰でも活かす事ができる!』そんな自信があるのです。自分もですが、関越統括も少し控えめな方が多いですが、そんな人間が、統括が、こんなに稼いでいるんだ!こんなに豊かなんだ!ってなったら、ちょっとカッコいいじゃないですか。私にとっては、自社だけではなく関越統括本部も全部ひっくるめてが『承継』です。たまたま今回は前に出る『会長』というポジションにあたっているだけで、関越統括本部は親が初期のメンバーの一人で立ち上げ当初からやって来た事だから、時の役職がどうこうではなく、組織の60周年、70周年、その先の未来を見据えて関わっていきたいと考えています。今後はSPC全国組織でも縁の下の力持ち的な、目立たないけれど重要なポジションを創っていきたい。父と私は2人でフルマラソンをしているのですが、親子揃ってマラソン人生です。地味でも厳しくても長く走り続ける。そしてたくさんの指導やフィードバックを頂いた関越統括本部の仲間や全国の仲間の皆さんに、恩返しが出来るようになりたい」

と、力強いコメントを残した。

ぐんまマラソンにて親子でフルマラソン完走

地域貢献と地方活性

㈱エレガンスでは、地元の「高崎まつり」にて9回連続で企業神輿を出したり、「群馬県民マラソン」にもお客様を巻き込み、7回連続で参加している。また、高崎コミュニティールームを開設したり、障碍者の実習とその雇用を目的にタオル事業部を開設。また、技能五輪全国大会では20年連続で群馬県代表を輩出した。さらにはNPOで「美と健康フォーラム」を主催したり、ネパールに井戸を寄付したりするなど、組織外でも彼らの活動は、幅の広さが伺える。

その功績として、群馬県知事賞、厚生労働大臣功労賞、黄綬褒章を受賞するなど、祖父時代より3代に渡り、数々の名誉を残している。

その件について和廣氏は、

「我々がこれまでやって来た事が、このように評価されるのは本当に嬉しい事です。その原点にはSPC関越統括本部の初代内山会長、第21代新井理事長、各室員のお力添えと、現会長を拝命した息子への、親子故に足りないご指導を頂き、心から感謝しています。また、SPC関越の次世代を担う若手執行部の活躍が目覚ましく、会長をさせて頂いている喜びを感じています」

と語った。

和廣氏はSPCグランドデザインの通り、営業者から経営者へ、経営者から組織人へ、組織人から文化人へ、そして世界へと無限の挑戦をし続けている。この事こそが、彼らの承継の揺るがぬ基盤になっていると言えよう。

「一瞬が10年に匹敵する一瞬が有り、10年も一瞬にしかない10年も有る」

これは和廣氏が入会して間もない頃、横山室長が講義で語った哲学的名言だそうだ。

SPCと出逢い、和廣氏が美容経営者への道を決断したあの一瞬。それが今ではこんな素晴らしい現在に繋がっている。お互いが瞬々の今を輝かせながら、今後も2人は走り続けるだろう。

厚生労働大臣から表彰状を受賞

内閣総理大臣から黄綬褒章を受賞

㈱エレガンス

群馬県高崎市井野町天水1016-1
TEL 027-363-0115
http://www.elegance-grp.co.jp